

幼児の発達過程における「現代的なリズムのダンス」 “Contemporary rhythmic dance” in developing process of infant child

石川 浩子¹⁾

Hiroko ISHIKAWA

Abstract

In recent years, “Contemporary rhythmic dance” has been emphasized due to the new school curriculum guideline which requires dance education in junior high school, and dance lessons are becoming more popular amongst younger kids especially in the range of three to five years old children. Different from adult dance, it is considered as kids dance plays an important role in mental and physical development of the infant child. This paper aims to propose the next level of kids dance training materials by combining the unique physical movement of dance, and the exercises which are necessary for kids in the developing process.

Keywords : *dance education, contemporary rhythmic dance, the new school curriculum guideline, kids dance*

研究目的

近年、幼児向けのダンスレッスンやダンスコンテストを通じてキッズダンスへの関心が高まっている。また、平成24年より中学1、2年生におけるダンスの必修化が完全実施となり、中でも「現代的なリズムのダンス」（「ロックやヒップホップなどの現代的なリズムの曲で踊るダンスを示しており、リズムの特徴を捉え、変化のある動きを組み合わせ、リズムに乗って体幹部（重心部）を中心に全身で自由に弾んで踊る事をねらいとしている」とある。）¹⁾は注目されている。幼児の保護者だけでなく、社会全体がダンス教育そのものへの高まりを見せてきている。自分の子供を幼児期（3～5歳）にダンス教室に通わせ、有名なダンススタジオや芸能プロダクション主宰のダンスレッスンに通わせるなど、流行を意識したダンスやダンスレッスンもはやっている。しかし、幼児は大人と違い意思能力が発達しておらず、自分のやりたいことを意思表示できないことから、大人（保護者、保育者など）が用意した環境でしか、ダンスを知り経験することができない。このような親の嗜好によって決定される状況および条

件が、幼児にとって本当に望ましいことなのか、幼児の発育にどんな影響をおよぼすのか、懸念を抱かずにはいられない。

このように、幼児のダンスに対し、多くの懸念や疑問があるなかで、幼児の発達過程において「現代的なリズムのダンス」の必要性や効果を、いろいろな側面から調査し研究する必要があると考える。幼児自身のためにある、幼児の心と身体の両方を健やかに育てることのできるダンスレッスンの開発が必要である。

それを立案する準備として調査をまとめたものである²⁾。

研究方法

- ① 幼児ダンス（リトミックや創作ダンス、児童舞踊など）や、幼児教育、幼児運動など、幼児に関する既存の文献を調べる。
- ② 実態調査
 - 1) 現状視察（実態把握） 対象：都内3保育園
 - 2) アンケート調査 対象：幼児向けのダンス指導者49人（東京19・埼玉6・神奈川5・静岡1・千葉2・名古屋10・大阪3・長野2・北海道1）
 - 3) 観察 対象：幼児教育24クラス（内訳：体育3・体操3・新体操1・バレエ3・リトミック

1) 日本女子体育大学（非常勤講師）

2・ダンス12)

- 4) 聞き取り調査 対象：ダンス教室に通わせている保護者10人(キッズダンス5人・ジュニアファンク2人・ロックダンス1人・ヒップホップ1人・ジャズダンス1人)

I. 幼児の運動能力の現状について

幼児のダンスレッスンの方法を立案する上で、幼児の動き、運動能力の現状を把握し、認識することは、必要不可欠である。近年、体を使った幼児教育(体育、体操、バレエ、リトミック、ダンスなど)が盛んであるにもかかわらず、幼児の運動能力、体力は低下し続ける傾向にあり、それを危惧する声は年々高まっている。現段階では、国をあげて取り組む姿勢も見られるが^{③)}、いろいろな側面から幼児の運動能力、体力の低下の原因を考えなくてはならない。

その原因の内、最も重要だと考えられることは、幼児を取り巻く社会環境の変化であろう^{④)}。私たち大人自身が生活を豊かにするために、全てにおいて利便性を追求し、生活形態を変化させ、社会の都市化を生み、幼児から自由に遊ぶことのできる空間を奪ってきたことは確かであろう。

大人とは違いまだ意思能力が発達していない幼児は、大人(保護者、保育者など)によって与えられた環境のなかでしか自分の体を動かすことができないのが現状である。実際に幼児の遊びにつきそう保護者や保育者自身が、外遊びや自然な遊びの経験の少ない世代となっていることから、幼児期にふさわしい環境を十分に準備し一緒に体を動かすことができないのではないかと推測できる。

それに加え、幼児を対象にしたテレビ番組や、ビデオやテレビゲームなどの商業的側面も無視できず、体を動かす遊びの減少は、幼児の成長にとって厳しいものであり、その状況はなかなか改善されない状況である。

一方、幼児が長い時間生活する保育園や幼稚園での遊びの状況はどのようになっているのだろうか。

そこで、保育園や幼稚園などを筆者が調査したところ、場所によっては、早い段階から幼児の運動機能に関心をもって、率先して運動(動くこと)に力をいれているところが増えてきている。

以下にポピンズナーサリースクール東品川の施設長である最首文子氏(20年以上の保育経験)へのインタ

ビュー調査での発言を掲載する。

20年前の幼児と比較すると、幼児の体の変化には危機感をもっている。特に体力(持続力)の低下に加え、心の発達も重要な問題になってきている。雑巾がけをさせると^{⑤)}腕の力が弱く自分の体を支えきれずにバランスを崩し転んでしまい、前に進まない。保育園内の体操教室では、鉄棒にぶら下がることはできても、長くぶら下がることができず、まだ余裕がありそうなのに少し疲れてくると、すぐにやめてしまう子が多いなどの幼児の体力(持続力)低下は問題である。

また、吉田、朴、鈴木らによれば「園での散歩では近くの公園まで歩かず途中で座り込む、年長児になっても階段を一段ずつ送り足で降りる、段差もないようなところで転ぶ、転んだときに手が出ず顔から倒れこむなどの、例をあげればきりが無い。」^{⑥)}

この結果を受け、幼児を対象にしたダンス教室の指導者にアンケート調査を行った。その結果、近年の幼児の体の問題点として上位を占めたものは、49人の自由記述による回答(複数回答あり)の内「運動能力が低い」12人、「体力の低下」8人、「体が硬い」7人、「すぐに疲れる」4人など、保育園での幼児の様子と同じ深刻な状況であることがわかり、近年の幼児期の体の発達が危機的状況にあることがわかる。

II. 幼児期に必要な動きとダンスについて

近年の幼児の動き、運動能力の現状を認識した上で、次に大切なことは、幼児にとってどういう動きが足りなくて、どういう動きが必要なのかを知ることであろう。幼児の体は単に大人を小さくしたものではなく^{⑦)}、幼児には幼児期に経験しなければならない動きがあり、それを獲得することがその後の体の発達に大きな影響を与えるのだろう。

国をあげてそれに取り組む姿勢の表れとして、文部科学省が「幼児期運動指針」(2012)というガイドラインを策定している。その中で「幼児期には、生涯にわたって必要な多くの運動の基となる多様な動きを幅広く獲得する非常に大切な時期である」^{⑧)}と述べている通り、できる限り多様な動きをバランスよく経験し習得することが必要である。

さらに中学校「新学習指導要領」のダンスの解説に

は、「現代的なリズムのダンス」について「リズムの特徴をとらえ、変化のある動きを組み合わせ、リズムに乗って体幹部（重心部）を中心に全身で自由に弾んで踊ることをねらいとしている。」とあり、変化の動きの例として「手拍子、足拍子、スキップ、片足とび、両足とび、蹴る、歩く、走る、ねじる、回る、転がる、振る、曲げるなどの動きを素早く動いてみたり、止まったりすることを組み合わせる踊ること」とある⁽⁹⁾。このような動きは、幼児期から小学校段階にかけて生活や遊びの中で獲得されていくものと考えられ、なるべく早い時期から、少しずつでも多様な動きを経験することが必要であると考えられる。

1980年に体力科学センターが調べたところによると、幼児が全身的な運動機能の基礎を獲得するには、できる限り遊びや生活習慣などの自然な環境のなかで84種類もの基本的な動きを繰り返すことが必要であると述べている（表-1）。

この84種類の基本的な動作を、実際の幼児の動きに当てはめて考察してみたい。この84種類の動作は大きく分けて「平衡系の動作」「移動系の動作」「操作系の動作」の3つに分類することができる。

そのなかでも「平衡系の動作」とは、体のバランスをとる動きのことで、幼児期に必要な動きのベースとなるものである。「立つ、しゃがむ、まわる、ころがる、おきあがる、のる、わたる、ぶらさがる」など、本来ならば、幼児の生活習慣や遊びのなかで経験できる範囲の動きであることがわかる。

まず、「立つ、しゃがむ」の動きを考察すると、この2つの動きを繰り返すことにより、下半身の筋肉に働きかけることができる。これにより、幼児の体のなかに安定したバランスを保つことができる機能が育つことになる。この安定したバランスとは、バレエの基礎でもある身体の芯のようなものを軸にした大切な機能であり、「現代的なリズムのダンス」においても身につく機能である。体に運動の軸となる芯ができることによって、背筋も伸び、姿勢もよくなり、運動機能やダンスだけでなく幼児の体そのものの発育にもつながる。こうした基本的な動きを通じて幼児が得るものは多く、基本的な動きは大切である。

次に、「さかだちする」という動きをみると、この動きは腕を伸ばして支える運動になり、腕の筋肉（上腕三頭筋、上腕二頭筋）だけでなく、脇（三角筋）などの上半身の筋肉にも働きかける。幼児のための運動プログラム「柳沢運動プログラム」を考案した、松本短

期大学柳沢秋孝教授によると⁽¹⁰⁾、この動きを支持運動と位置づけ、この支持運動をするために必要な力である支持力が現代の幼児に一番欠けている力であると述べている。名前の通り、自分の体を支え持ち上げるといふ動きである。しかし前述したように、近年の幼児はさかだちどころか、雑巾がけさえできずにいるのが現状である。

このさかだちの動きに関して、幼児以前の0歳からの生活習慣が関係していることがあきらかになってきている。柳沢によると、畳の生活から床の生活に環境が変化し、早く立てるようになって欲しいとか、床のほこりが気になるとか、大人のいろいろな思惑から、ハイハイをさせずにすぐに立たせてしまう傾向があるという。しかしこのハイハイこそが支持力を育てるのにとっても大切な運動であるという⁽¹¹⁾。

今回、アンケート（アンケート調査の集計 参照）に協力して頂いたキッズダンスの指導者である森香純先生は「今までに数人ですが、運動に適さない子、歩くのも危ない感じの子、骨の問題なのでしょうか、そういう子たちは普段からけがが多く、レッスンをさせるのがとても怖いです」と記述している。筋力の低下が生まれたときの環境などに影響を受けて、その後の幼児の運動（ダンス）に大きく響くことになる。

ダンスによく使われる「まわる」という動きを考察すると、マット運動で前転する、寝ころんでのばして横に回転するように回るという動きだけでも沢山の動きがあるのがわかるが、まわるという動きはそれを繰り返すことで、回転感覚が身に付いて体のバランスをとるのに役立つ、三半規管の発達にも働きかける効果があるという。三半規管が強化されることにより、運動機能だけでなく、車酔いが少なくなるなどの効果もみられるが、この回転感覚は10歳を過ぎると身に付けるのが難しいことから⁽¹²⁾、幼児期にこそ必要な動きといえるだろう。

このような基本的な動きを幼児期に積極的に取り入れて経験させなければならないが、これらの動きを経験できずに成長をしていくと、これらを自分の体に適応させることが、ますます難しくなる。

幼児が自ら運動を楽しむこととして経験できる場所を増やし、幼児期に必要な動きであり、その後の体の発達の基盤になる基本的な動作を積極的に経験させて習得させる必要がある。ダンスがこの方向性を補うだろう。

Ⅲ. ダンス教育の工夫と一具体例

どうしたら幼児自らが興味を持ち、楽しいと感じ、動くことができるのか。幼児にとって動くための動機は大切である。本研究におけるアンケート調査では、幼児を対象にしたダンス教室での指導者が、現在の幼児について感じる心の問題点としてあげたのは、「集中力がない」13人「落ち着きがない」6人、「目を合わせられない」3人などであった。(49人の自由記述による回答(複数回答あり))。本稿Ⅰで、幼児の持久力、筋力の低下など運動機能の低下を指摘したが、加えて、集中力の低下、自主性の低下など、幼児の精神面の弱さも見過ごすことはできない。

しかし、本研究の調査結果によれば、現在、幼児を対象にしたダンス教室での指導者たちの中には、こうした問題を重要と考え、ただ、ダンスを教えればよいということではなく、どうしたら幼児が自分自身で楽しむことができ、ダンスを通して運動機能の向上を手助けできるのかを、日々考え、試行錯誤している姿も見られる。調査項目「ダンスレッスンで心がけていること」に対して、「やる気ができるように、少しでも出来たら褒める」15人「踊ることの楽しさを伝える」10人「大きい声で話し、幼児の集中力を切れさせないようにする」6人「挨拶や、ルールを教える」6人「幼児の目線に合わせ、しっかり目をみて指導する」4人などの回答があった(49人の自由記述による回答(複数回答あり))。

以下に、スポーツクラブ内の幼児を対象とした「ジュニアファンク」というダンスジャンルのクラスにおける結果を検討する。

観察対象としたダンスクラスの様子

全ての幼児がまだまだダンスの実力は未熟であるが、45分間のレッスンを先生が指定した休憩時間以外座ることもなく、真面目な目で先生の話聞き、繰り返し練習することで、大量の汗をかきながら、本当に一生懸命楽しそうに踊っていた。この先生の指導方法はとにかく大きな声で生徒全員に話かけ、少しでもできる様子が見えると、すぐにそばに行き褒める。注意や指導するときは、幼児の目線まで腰をかがめて、幼児の目を見てゆっくりと大きな声で話かける。

このように、繰り返し練習させることで体力も向上

し、ダンスも上達する。上達すれば、達成感を味わい満足感を得ることができる。声をかけることで、幼児の集中力を途切れないようにさせ、褒めることでやる気を引き出すことができる。幼児の心をつかむように積極的に取り組むことで、生徒と先生のコミュニケーションも充実し、信頼関係を築くことができる。

ダンスという分野を通じて、こんなに数多くの感情を経験することができるという好例だろう。このような例を私たちは知っている。ダンスの効果を認識している。そしてダンスを通じた心身の成長に期待する。しかしダンスが持つ特有の弊害を忘れてはならない。

Ⅳ. 幼児のダンス教育に見られる課題

幼児対象の教室の場合には、幼児の集中力を維持させるという工夫以上に、幼児の保護者の関心が問題となっている。本研究におけるアンケート調査では、幼児を対象にしたダンス教室の指導者が、保護者の問題点としてあげたのは、「親が一生懸命で、本人には全くやる気がないのに、レッスンを受けている」「親が見ていると親に頼る子が多い」「親が見学していると、レッスン中も親のことが気になり集中力がもたない」「レッスン中に親が注意することで、流れが悪くなり、それがきっかけで泣く子もいる」などである。(49人の自由記述による回答(複数回答あり))

幼児自身の意思や個性とは別の要因が動機となる傾向があり、保護者の希望や夢、そしてダンスを子どもにさせているという満足感が、ダンス教育の根底にあるように思われる。

このことは、指導者や保育者の努力を阻害する場合もある。確かに幼児は意思能力が未発達であるが、保護者であれば、その子の個性や、行動、思いなどは、普段から感じ取ることではできないのではないだろうか。しかし親が自分はダンスが不得意で運動音痴だったから、自分の子供をキッズダンスコンテストで優勝させたい、自分の夢だった芸能界にデビューさせたいなど、親の勝手な思いと希望が幼児の目的意識を低下させ、幼児自らが感じなければならぬ感情を抑えつけているような例もある。

川崎にある有名なダンススタジオの幼児クラス(3歳～5歳対象)を見学し、指導の流れや方法、幼児の様子などを詳しく観察することができた。

そのクラスでの指導方法は、出席をとり、挨拶を

してから軽く体の柔軟体操であるストレッチをして、すぐにトイレと水分補給のため10分間休憩、その後は、夏にある有名ダンススタジオ主宰のキッズダンスのオーディションに受かるための振付を教え、残り20分のレッスン時間の振り分けは、残り5分で幼児への指導をして、残りの15分間に保護者がスタジオに入り、先生は幼児ではなくこの保護者にオーディションの振付を教え、教え方まで説明するというものだった。保護者はそれを真剣に聞き、自分の子供ではなく、振付を踊っている先生を撮影して終了した。

このクラスは誰のためのレッスンだったのであろうか。

V. ま と め

この報告は、I. 幼児の「体力」が低下している現状をあげて、II. その改善のために「体づくり」が必要であり、III. そのためにダンスの動きがそれに役に立つことを述べた。しかしIV. こうした教室は幼児が対象であるだけに、親の考え方や願望が子供の踊る喜びや、やる気に大きく影響することを示した。

本報告の調査、観察、アンケートなどから、指導者は幼児のためのダンスの指導を工夫しており、そのような教室では子どもたちが生き生きと踊る姿を観察することが出来た。さまざまな運動の体験や、楽しく踊り続ける様子から、懸念される幼児の体力の低下に対しても良い運動の刺激となる可能性がうかがわれた。

今後の展望としては、ダンス固有の体の動かし方と、幼児の体の発達に必要な動きを連動させて、幼児ダンスの新しい指導教材「現代的なリズムのダンス」を開発したい。合わせて幼児のやる気や集中力を高める工夫、保護者に対するガイダンスなど、幼児教育の課題にも対応する内容を具体的に示し、広く発信していきたい。

「幼児ダンスレッスンについてのアンケート」

- ① レッスンではどのような曲を使用していますか？また、その曲を使用する理由を教えてください。
- ② どれぐらいのレッスン時間ですか？自分で時間を設定した方は、その時間にした理由を教えてください。

- ③ レッスンの方針、方向性を教えてください。
- ④ レッスンをする中で、心がけている事はなんですか？
- ⑤ 現在教えていて、幼児に対して問題点を感じていることがあれば教えてください。
 1. 心の問題点について（例：注意するとすぐに泣く子が多い、気が強い子が多いなど）
 2. 体の問題点について（例：すぐに疲れる子が多い、足腰が弱いなど）
- ⑥ 鏡を使っていますか？使う・使わない どちらの場合でも理由を教えてください。
- ⑦ 親は付き添い、見学しますか？する・しない どちらの場合でも理由を教えてください。
- ⑧ 最後に、私が質問した以外に、幼児のダンスについて感じている事など自由に書いてください。

アンケート調査の集計（回収数49）

（今回の研究に必要な重要部分だけを抜粋している）

- 1) 体の問題点について（上位を占めたもの）
 - ・運動能力が低い（12人）
 - ・体力の低下（8人）
 - ・体が硬い（7人）
 - ・すぐに疲れたという（4人）
 - ・元気がない
 - ・背筋が弱い
 - ・まっすぐ座れない
- 2) 心の問題点について（上位を占めたもの）
 - ・集中力がない（13人）
 - ・落ち着きがない（6人）
 - ・目を合わせられない（3人）
 - ・上達したいという意志が見えない
 - ・挨拶が出来ない
 - ・できない事をすぐに諦める
- 3) ダンスレッスンで心がけていること
 - ・やる気ができるように、少しでも出来たら褒める（15人）
 - ・踊る事の楽しさを伝える（10人）
 - ・大きい声で話し、幼児の集中力を切れさせないようにする（6人）
 - ・挨拶や、ルールを教える（6人）
 - ・幼児の目線に合わせ、しっかり目をみて指導する（4人）

(表-1) 基本的な動作と分類

体育科学センター, 幼カリキュラム小委 (1980)

カテゴリー	動作の内容	個々の動作		
安定性	姿勢変化 平衡動作	たつ・たちあがる かがむ・しゃがむ ねる・ねころぶ まわる ころがる	さかだちする おきる・おきあがる つみかさなる・くむ のる のりまわす	わたる あるきわたる ぶらさがる うく
移動	上下動作	のぼる あがる・とびのる とびつく	とびあがる はいのぼる・よじのぼる おりる	とびおりる すべりおりる とびこす
	水平動作	はう およぐ あるく ふむ	すべる はしる・かけっこする スキップ・ホップする 2ステップ・ワルツする	ギャロップする おう・おいかける とぶ
	回転動作	かわす かくれる くぐる・くぐりぬける	もぐる にげる・にげまわる とまる	はいる・はいりこむ
操作	荷重動作	かつぐ ささえる はこぶ・はこびいれる もつ・もちあげる かえる あげる	うごかす こぐ おこす・ひっぱりおこす おす・おしだす おさえる・おさえつける	つきおとす なげおとす おぶう・おぶさる
	脱荷重操作	おろす・かかえておろす うかべる	おりる もたれる	もたれかかる
	捕捉動作	つかむ・つかまえる とめる あてる・なげあてる ぶつける いれる・なげいれる	うける うけとめる わたす ふる・ふりまわす	まわす つむ・つみあげる ころがす ほる
	攻撃的動作	たたく つく うつ・うちあげる うちとばす わる なげる・なげあげる	くずす ける・けりとばす たおす・おしたおす しばる・しばりつける あたる・ぶつかる	ひく・ひっばる ふりおとす すもうをとる

4) 保護者の問題点について

- ・親が一生懸命で, 本人には全くやる気がないのに, レッスンを受けている
- ・親が見ていると親に頼る子が多い
- ・親が見学していると, レッスン中も親のことが気になり集中力がもたない
- ・レッスン中に親が注意することで流れが悪くなり, それがかきかけで泣く子もいる
- ・テレビの影響があるようで, ダンスへの興味は本

当に強く感じます。ただその分, 幼児より親の関心が高くなり, やれさえすればいい, 発表の場があればいいと納得する傾向が強いと思います。中味の充実はどう求めているのでしょうか。

- ・自分でやりたい, 上手になりたいという気持ちが少なく, 親にやらされていたり, 親に褒められなくて頑張るといふ子も多いので, 自分で積極的にレッスン内容を吸収して頑張る, 上達することにつながるのが難しく思います。

(注)

- 1) 文部科学省 新学習指導要領・生きる力 中学校学習指導要領解説 体育分野 保健体育編 ダンス (2008) p.120
- 2) 筆者自身が子供のためのジャズダンス指導をしてきたこと、そして5歳の子供の母であることが、この領域の問題に切実な関心を向けることになった直接の動機といえるだろう。
- 3) 文部科学省「幼児期運動指針」2012年3月
- 4) 同上
- 5) ボビズナーサリースクール東品川保育園では、幼児の体力(持続力)の低下を問題視して、保育園での試みとして雑巾かけを体力(持続力)向上のために施行している。
- 6) 岩崎洋子編 吉田伊津美・朴淳香ほか(2008年)「保育と幼児期の運動遊び」1. 運動はなぜ幼児に大切(必要)か 吉田伊津美著 p.13 萌文書林
- 7) 同上 1. 運動はなぜ幼児に大切(必要)か 朴淳香著 p.15 萌文書林
- 8) 文部科学省「幼児期運動指針」2012年3月
- 9) 文部科学省 新学習指導要領・生きる力 中学校学習指導要領解説 保健体育編 体育分野 ダンス (2008) p.120
- 10) 柳沢秋孝著(2002年)「生きる力を育む幼児の柳沢運動プログラム 基本編」オフィスエム p.35
- 11) 柳沢秋孝著(2002年) p.36
- 12) 同上 p.47

参考文献

- 1) 飯塚恭一郎著(2010)「幼児の体が動くための動機に関

- する一考察 - 3歳児の運動遊びの事例分析に基づいて-」幼児児童教育研究 第22号
- 2) 石倉瑞恵著(2009)「幼児の運動遊びの方法と環境に関する考察 -精神・運動機能の発達の視点から-」名古屋女子大学紀要55(人・社)
- 3) 岩崎洋子編 吉田伊津美・朴淳香ほか(2008)『保育と幼児期の運動あそび』萌文書林
- 4) 川島明子著(2012)「『体験としての児童舞踊』からみえてくる子どもの身体表現とはなにか(1)」第82号研究紀要
- 5) 小林功・高柳恭子・岩淵千鶴子ほか(2007)「しなやかな心と体の育成をめざして 一体を動かす喜びを引き出す協同的な活動-」宇都宮大学教育学部 教育実践総合センター紀要 第30号
- 6) 松崎洋子・無藤隆・石沢順子ほか(2011)「幼児の身体能力の発達に関する研究 -経験の効果-」埼玉学園大学紀要(人間学部篇)第11号
- 7) 体育科学センター, 幼カリキュラム小委(1980)「基本的な動作と分類」
- 8) 田中沙織著(2009)「幼児の運動能力と基本的運動動作に関する研究 -自由遊びにみる運動能力別の基本的運動動作比較の試み-」幼児教育研究報 第31巻
- 9) 柳沢秋孝著(2002)『「生きる力」を育む幼児のための柳沢運動プログラム』オフィスエム

(平成25年9月10日受付)
(平成25年12月18日受理)

